インドの聖典　　第一回

この講義はムニンドラ・パンダ師によって、二〇一二年四月十日に東京銀座で行われました。
その内容を茶丸が記述したものです。

序

インドについて思いめぐらす時、心に立ち現れるものは何であろうか。
それは偉大なる仏陀、ヨーガやアーユルヴェーダのような様々な哲学体系、そして世界のあらゆる言語の母たるサンスクリット語など、このような主題がさらに湧き上がるであろう。これら全てはインドの様々な聖典に深く根ざしている。インドの聖典、とりわけヴェーダはすべての学問の土台である。

さて、インドの重要な聖典を主題とするのが本書である。簡潔に述べるならば、聖典とはすなわち人生の手引書である。如何なる機器を操作する場合にも、まずは手引書を読むことが必須であろう。取扱説明書に目を通すことなく機械を操ることは困難を伴う。人の人格はこの世において最も複雑な機械に例えることができる。そして、これを動かすために、聖典は人生の手引書となる。それゆえ聖典を日常的に学習することは人生において重要なのである。

世界には多種多様な聖典が存在するにもかかわらず、なぜインドの聖典のみが特筆に値するのであろうか。そしてなぜ、あえてインドという言葉が付け加えられるのであろうか。
基本的に、インドの聖典が主題とするのはアートマーただ一つに尽きる。他の聖典との相違点とは、インド聖典はアートマーという言葉のみを打ち鳴らし続けているということである。では全てのインド聖典が語るところのアートマーとは一体何か、ここで理解しよう。

この本で表されるアートマーという唯一の言葉は、万人が人生をかけて探究しているものであり、各々が有する専門的視点による至高の境地を示す。
これは生きとし生けるものすべての核となるもの、全宇宙の土台である。

このアートマーは聖者パタンジャリが記すヨーガスートラにおいてプルシャと呼ばれる。
ヴェーダでは無論アートマーとして知られ、哲学においては智慧と認識される。宗教においては神として信じられ、科学では意識として理解される。そして芸術における審美、自然愛好家における恍惚の境地、法律家達にとっての最高の判決、文法家における最上級、一生を通じて尊敬されることを求め、愛を人生の頂点と認める人々にとっての比類なき愛、学問における知識の頂点、最終的に一般の人々にとっては「私自身」という基盤。
このようにアートマーはそれぞれ特定の人々にとっての専門分野における最高の段階を示す。
もしアートマーというただ一つの言葉が語られるなら、このように理解すべきである。
その人の思考器官に流れる思考が停止し、想像の域を超えた、この上なきもの、それがアートマーである、と。

ナマステという挨拶について

先生：まず始めに、お互いに合掌し「ナマステ」という言葉で挨拶しましょう。これがヴェーダの伝統的な礼法であり、インドのみならず多くの東洋の国々で礼拝の作法として追随されています。皆さんはこれまで、ナマステという言葉を耳にし、その動作を目にしたことがあるでしょうが、なぜナマステと言うのか、その意味はご存知でしょうか。
では、その背後に潜む哲学を理解しましょう。ナマステとは「ナマス」と「テー」という二つの言葉が結合し形成されています。「ナマス」とは「帰命」、もしくは「敬礼」を意味し「テー」とは「あなた」を示します。それゆえ、「帰命します」、「敬礼します」といった意味が込められているのです。インド哲学においては、この挨拶の動作そのものが重要な印相（ムドラー）として考えられています。知っての通り、全てのムドラーは言葉もしくは文字で伝えることが不可能な特定の伝達事項を表示しています。

時間の制約や口という器官を用いる場合に生じる限度、そして個人が携える知識に限界があるため、何千もの言葉を駆使しても伝えることのできない教訓を、たった一つの印を結ぶことで表現が可能となります。

印（ムドラー）である身振り言語によれば親指は自己の魂を象徴しています。「ナマステ」と告げながら合掌し、二つの親指を胸（心）に添えましょう。両腕は地面に対し水平に保ちます。この手印は心と魂の合一を表しています。心と魂が一つになるなら全宇宙とつながることができます。
このナマステという仕草は目の前にいらっしゃる方はもちろんのこと、全ての神聖なる存在とこの宇宙の存在原理を敬います。聖なる原理と述べるときには、意識ある生物のみならず、山、川、恒星や惑星など様々な自然現象としての、この宇宙における全ての神聖なる存在をも表しています。無論、握手も素敵な挨拶ですが、一度に一対一でしか交わすことができません。しかしナマステであれば、同時に何億もの存在とつながることができるのです。

聖典は人生の手引書

茶丸：常に先生は「聖典を学びなさい」と助言しますが、私達は毎日忙しく、人生を過ごすだけでもきりきり舞いであるのに、日々の予定の中でいつ、聖典の勉強をするための時間を見出す事ができるのでしょうか。また、聖典を学ぶための特別な時間を作る重要性とはどこにあるのでしょう。

先生：では、なぜ聖典を学ばなければならないのか、その必要性についてご説明したいと思います。聖典とは人生の手引書です。コンピューターや家電など近年出回っている、あらゆる種類の機械を手に入れた場合、まずはそれを操作するための取扱説明書を読まなければ、動かす事は困難です。同様に人間の人格そのものは、この世界において最も高価でありながらも複雑な機械です。しかし私達はいかなる手引書を紐解くことなく、この人生を動かし、いつも自分が何をすべきかなど当然のごとく知っていると考えながら生きています。それどころか、私は何でも知っているという事を前提に人生を始めます。そのため、様々な問題が降りかかる結果となるのですが、訪れたその困難に、どう対処してよいのか見当もつきません。なぜなら、これまで一度も人生のこれら手引書を目にすることでさえなかったからです。
また、この質問を別の視点から分析してみましょう。
人生の予定はプラーラブダ・カルマ（過去生からもたらされた今生で消費するカルマ）によって完全に定められています。したがって、この人生の予定表の中から一瞬たりとも余分な時間は得られません。そもそも、プラーラブダ・カルマの中に聖典を勉強する事やダルマを行う事は含まれてはいないため、これら自己努力を行うには、プラーラブダ・カルマが定めたこの予定表から、時間を搾り出さなければなりません。そのため、聖典の学習やダルマをなす事を教授する先生や支援者と、自分との間での対立は避けられなくなります。

去年（二〇一一年三月十一日）、東日本において突然の大地震が発生し、大きな津波も起こりました。私達は皆、これほどの巨大地震について聞いた事もありませんでしたので、凄まじい衝撃を受けました。巨大な津波が襲い、多くの村や何千もの人々を飲み込んでいったのです。今日に至るまで全ての亡骸は発見されていません。とはいえ、このような出来事は、どこにでも起こり得る事であり、無論自分も同様の危機にさらされる可能性があります。しかし、直面する準備はできているでしょうか？

通常、「これはそこにいた人々に起こった事で、私に降りかかることはないだろう」と考えています。私の友人はがんを患ったけれども、私にはそんな事は起こらない。私の祖父は亡くなったけれども、私は死ぬ事はない。死は他の人々には訪れても私のもとにはやってこない。これが常に偽りの世界にとどまる自我の立脚点になっています。
しかし、他の誰かに起こる事であれば、自分にも起こり得る事であると気付かなければなりません。自然災害などは、どこにでも襲来するものです。※カット友人ががんに冒されたというなら、私もがんに蝕まれるかもしれず、祖父が亡くなったというなら、次は私の番かもしれません。このような赤裸々な真実を人類に教示するもの、それが聖典と呼ばれる人生の手引書です。そのため聖典を学ぶ事は、大変重要です。

人生における問い

さて、真実を探求し、悟りへと向かう求道者はこのような問いを絶えず自分自身に投げかけるべきです。
私とは誰か。何処から訪れたのか。ここ（この世界）で何をしているのか。人生の目的とは何か。どのくらいの期間ここにいるのか。ここから何処へ赴くのか。両親や親戚、友人など周囲にいる人々とは誰なのか。

まず聖典は、真の自己認識について教えてくれます。これまで、私達は他の人々についてよく学びました。あらゆる政府関係者、芸能人、そして全ての国々、惑星や恒星などについて知っています。しかしたった一つ、自らが知る事のないもの、それは自分自身についてです。自分以外の様々な事柄を知っている、あるいはさらに知ろうと努力している、これこそが人生の問題です。
この点について教え導いてくれるのは誰であるのかと、両親に尋ねてみたとしても、彼らは一家の系譜についてはよく説明し、自我を後押ししてはくれるものの、真の己自身を認識してはいません。そこで友人に質問してみましたが、彼らもまたどこの歓楽街に行けば、より楽しめるのか、どこの飲食店の食事が美味であるのか、といった事を教えてはくれました。しかし、この点については口を閉ざしてしまいます。皆、多種多様な理由をつけては、その主題へ向かわせまいとします。つまり誰も私自身について教授できる人はおらず、唯一、指南するのは聖典のみです。

それゆえ、日々聖典の学習に励む事により、これらの書物が真の自分自身を教えてくれます。ですから皆さんには、毎日少なくとも数分間でかまいませんので、何らかの聖典について学ぶ事をお勧めします。この世界にはたくさんの聖典が現存していますから、真の自己認識について諭す聖典であればどんなものでも良いので、それらを探し学んでください。

基本的な問いのうち、第一に理解すべきは「私とは誰か」についてです。これが人生における最初の質問ですが、そのように尋ねられたとしても人々は「私はけいこです」、「れいこです」と名前を簡単に答えます。けれどもそれは真の己自身ではなく、自分がこの世に生を受けた時に、両親、もしくは年長者がこの肉体に対して名付けたものです。これら氏名は肉体とともにやってきたがゆえ、肉体が失われた後には忘れられてしまうものです。ですから、宛がわれた名前とは、自分自身ではありません。真の自分自身は絶えることなく存在しても、肉体に名付けられた氏名は失われてします。自己とは魂であり、意識です。それは永遠なる存在です。対する肉体とは、一時的なはかないものです。

第二の問いは、私はどこからやってきたのか、という事です。例えば皆さんに「どこからいらっしゃいましたか？」と尋ねたとします。ある人は「大阪から来ました」と言い、またある人は「沖縄から来ました」とおっしゃるかもしれません。しかしそれはここでの議論に対する適切な答えになりません。私の身体は沖縄や大阪で育ったかもしれませんが、私自身は真にどこからやって来たのでしょうか。ここで述べている「私自身」とは自己の核となる魂を示しています。その

魂とは一体どこから訪れ、さらにはこの世界にどれくらいの間、留まっているのでしょう。

そして、次の問いですが、ここからどこへ行くというのでしょうか？
ここから、という文言は、この肉体を去ってから、という意味を示しています。現在の体を生かしたまま、この世に永遠に生きながらえることはできませんし、肉体とともにこの世から脱却する事もできません。百年後には、この教室にいる誰一人として生存してはいません。なぜなら肉体を持つ人類がこの世界に留まれる最長の年月は百二十年であるからで、その後は残存する事はできないからです。自分はこの世界から去らなければなりませんが、一体どこへ行くというのでしょうか。次に向かう場所の住所を知っていますか？ そしてここで何をしており、はたまた何を行うべきなのでしょうか。私たちは、これらの答えを知らぬまま生き続けているのです。

ある人はこの世界において非常に富裕ですが、ある人はとても困窮しています。ある人はたいそう強力で、ある人はひどく脆弱な肉体を持っています。ある人は極めて長生きで百二十歳までの長寿を全うしますし、ある人は夭折してしまいます。なにゆえこうした事全てが生起し、また一体誰が原因で、このような問題を人生にもたらすのでしょうか。人々はこの世界で幸せに生きているというのに、なぜ津波や地震などの自然災害を被らねばならないのでしょう。このような問いに対する答えを与えてくれる書物が聖典と言われます。そして、この授業ではこれら学術書について議論していきますので、簡単に前置きを申し上げました。

インドの聖典について学び始めます。以前からこちらでは、大変有名なインドの聖典のうちの一つであるバガヴァッド・ギーターを学んでいました。しかしバガヴァッド・ギーターと同様、聖典の世界において重要な学術書は他にもたくさんあります。今後しばらくは、名高いインドの聖典の様々な題名について主に学んで行きます。それらはインドのみならず世界においても偉大な文献です。聖典の内容についてはあまり多くの時間を割きませんが、聖典の名とその著者について勉強していきます。無論、図書館には何億もの蔵書が並んでいますし、あらゆる書物は偉大であると言えます。それらの題名を書き出すだけであっても、この人生で完了させる事は不可能です。また、今、存在している本の話をしている間にも、毎瞬、新刊は出版され続けています。けれどもここでの目的は、少なくとも千年は本棚に尊敬とともに置かれた、不朽の聖典について議論する事なのです。

聖典の名そのものでさえマントラ（真言）である

先生：なぜ内容を学ぶ代わりに、これほど様々な聖典の名だけを知る必要があるのでしょうか。なぜならインドの各聖典の名とは一つ一つの独自のマントラ（真言やお経）であるからです。題目を口にするだけで、マントラの詠唱に匹敵するほどの価値があるのです。知っての通りマントラは内的器官の浄化を促します。同様に聖典の名を繰り返し唱えることで、マントラの詠唱になります。神聖な書物の各々の題名は聖典がもたらすすべての内容を思い起こさせてくれます。例えば「ラーマーヤナ」と述べた場合には、ラーマ神の行った全ての遊戯のことを思い起こします。
同じように様々なプラーナの題名を述べるときには、この地上に降臨したそれぞれの異なる化身のことを想起します。これらの聖典の名はブラフマー神（梵天）のような偉大な神々やヴァールミーキ、ヴィヤーサ、パラーシャラ、マールカンデーヤというようないろいろな聖者たちの心に描かれたものです。一般の人々によって名づけられたものではありません。
ここでひとつ例を思い起してみましょう。
日蓮上人が教示した南無妙法蓮華経というお題目ですが、これは妙法蓮華経に対して敬礼しますという意味です。日蓮宗に帰依している人々は、日常的にこのお題目を詠唱し続けています。
南無は「ナマステ」のナマハ、つまり「私は敬います」という意味です。これは妙法蓮華経という経典の題名に「南無」を付けて敬礼を示し、「私は妙法蓮華経に敬礼します」と称えています。

それゆえ、ただ聖典の題名を記憶するだけで、多くの善行がもたらされる事により、内的器官が浄化されるか、もしくはより良い将来の人生がもたらされる事を信じている人々がいます。ですから、これら学術書の名を学んでいきましょう。聖典全体の内容は、その題名に全てこめられているものです。神聖な書物の内容を知りたいならば、まずはその題名に着目する事です。

質問を生み出すことは瞑想である

さて、主題を分析し学ぶ合間に疑問が生じるならば、それは瞑想し続けている事を象徴します。したがって授業で質問するという行為は、否定的な事ではありません。しかし、多くの人とともにいる場合においては、時間と状況を考慮して他の方がいたずらに時を費やしたと感じないように質問すべきです。また、一人で学んでいる時でさえ、主題の本筋からそれることなく、質問を生じさせるよう努めると同時に、今、紐解いている聖典から答えを見出すよう努力してください。なぜなら、ある章を読んでいる間、聖典は次から次へと新たな主題を導くために、胸裏に質問をさしはさみます。しかし、これら問い対する答えは後々の章で用意されているため、答えを得るに見合うだけの十分な時間と精力を注ぐことによって学習を継続する自己努力が必要です。それゆえ、得た答えに完全に満足しない限りは、真の回答を探す持続力を保つべきです。智慧に対する渇望が保たれ、智慧を探求する自己努力を続けるなら、いつしかその渇きは癒されるでしょう。ここで重要な点は、疑問を自己の内側に生かしておく事です。たとえ、自らの問いに対する答えが、周囲の如何なる師によって得られずとも、質問の灯火を絶やす事なく最後の瞬間まで保ち続ける事ができるなら、いつしか神ご自身があなたの師となって、答えをもたらすため降臨するでしょう。このように保持し続けた質問を瞑想のための燃料として用いることがインド聖典の特殊性です。

さて、この授業において二種類の生徒がいます。一種類目の生徒はこれまでの人生について、たくさんの質問を抱えています。それら問いに対する正しい答えを探し求める道中において、彼らは数々の場所、そして聖典を参照する様々な師のもとを訪れては、真の知識を学ぼうと望んでいます。
今日もまた、そのような方々が知識を求め、ここにも訪れていますが、この種の生徒は長期にわたって勉強を続けることができます。
例えこの授業で全てを学ばずに、しばらくの間、距離を置いたとしても、またどこか他の勉強会に参加することによって、これまでと同じの方法で知識の探求の旅を続けることができるでしょう。なぜなら彼らの携える疑問こそが、知識と交換することができる真の資産であるからです。

しかし、もう一種類の生徒は人生において、知識の資産としての質問があまりなく、ただの知的好奇心で授業に訪れています。少し学んでしまったら、好奇心が満たされ、質問がなくなってしまいます。それゆえ、学びから離れ、自分の通常の欲望を満たす世界へと舞い戻ってしまいます。とはいえ、しばらくの後には、このような人でさえ、再びこの道に回帰する可能性があります。

その人は、一度は自己にまつわる学びを放棄したにもかかわらず、一体どういった理由で、そこに立ち戻ることになったのでしょうか。もちろん彼らは欲望を満たすためにこの勉強から去りました。しかし踝を返した今は、間違いなく何らかの障害が発生しているため、欲望を満たすこと自体が妨げられています。如何なる魂も、一つの肉体を通じて、手持ちの財布の中いっぱいの欲望を満たすことは不可能です。
それゆえ彼らは種々の自然災害に直面したか、もしくは病気で苦しんでいるか、同類の生類やとある状況によって悩まされているのです。あるいは最終的に、以前このような勉強会を通じて聖

典から少し学んだ内容が何であれ、それが新たな質問を再び生み出し、学びの場へと舞い戻ってきたのです。

ここで肝心な点は、質問とは燃料であり、それはインドの聖典においてジュニャーナ・ヤジュニャ（知識の祭祀）のために必要なサミダーと呼ばれているという事です。生徒が先生のもとを訪れるとき頭上に薪を載せていきます。この乾いた木片をサミダーと呼び、それは哲学的には質問という形で現れる無知を象徴しています。護摩（ホーマ）ではこの薪をくべることにより火を生じさせます。同様にジュニャーナ・ヤジュニャにおいて、質問が湧き上がる事こそ、知識の炎を生じさせることになるのです。

どのようにして質問が瞑想の源となるのでしょうか。生徒によって尋ねられたいかなる質問も瞑想の主題となるのでしょうか。

ここで理解すべき重要な点は、質問者は問いを尋ねるための十分な準備が必要であるという事です。さもなければ質問自体が、勉強会に参加している他の方々に迷惑をかけることになります。さて、学びの道を歩む生徒が持つべき三つの資質については、バガヴァッド・ギーター4 章 34 節に美しく描写されています。

Tadviddhi praṇipātena paripraśnena sevayā

一）プラニパータ：プラニパータとは文字通りには挨拶もしくは敬礼を意味し、合掌しつつ頭を下げることを示します。
哲学的に、頭は自我を意味します。 頭を下げることは、自我を低くする事を示しています。 通常、自我はすべての知識を知っているものとみなしています。しかし、それは知識を得る道に障害を作り出します。 その結果、知識の流れは妨げられるのです。
なぜ自我は学習を阻むのでしょうか。
そもそもアートマーは知識の具体化であり、自我は無知の塊です。 両者は緊密であるため、自我はアートマーの立場をとり、「私は全てを知っている」と思い込んでしまいます。
個々の魂は、この世を経験するために誕生しました。それゆえ知識は、人生の課題ではありません。 学習の主題が議論になる時、自我は自分自身の経験を続けるために、そこから逃避したいのです。「私は知りません」ということこそ、知識を得るための出発点です。ですからヴェーダの聖者達、あるいは先生達は、正しい生徒を得るために特別なヤジュニャ（祭祀）を行います。彼らは、価値ある時間と精力を、ただ好奇心を満たすためだけに近づいてくる如何なる人々にも、教えを与えるために浪費したくありません; その代わりに、彼らは真に知識を学びたい正しい生徒に分け与えなければならないと望んでいます。

二）パリプラシナ：主題がその人の自身の無知を払いのけ、理解されるまで、繰り返し質問を尋ねることをパリプラシナと呼びます。 前述のとおり、疑問は無知の形である薪（サミダー）に例えられ、知識の炎で燃やされる必要があります。

三）セーワ：セーワは、奉仕を意味します。社会において、セーワという言葉は、師に対する実際的な世話であると誤解されていますが、それは正しい理解ではありません。ここでの、本当の師の唯一の目的は、生徒たちが得た知識の甘露を他者と分かち合い続けなければならないという事なのです。スヴァーディヤーヤ（自己学習）を完了した後に、その人は、セーワの一部でもあるプラヴァチャナ（知識を共有する）のためにも貢献すべきです。それゆえ知識は、正しい生徒へ広められるべきであり、絶える事なきガンジス川（智慧／ジュニャーナ）は永遠に流れ続けなければならないのです。

知識は人生における最高の楽しみ

知識は聖典の全ての言葉の背後に潜んでいることを記憶にとどめておいてください。それこそが一般に流布する本と聖典との違いです。
聖典を手にした時には必ず、幾ばくかの言葉を捉え、それら知識をハチの巣から蜜を取るように搾り出してください。人として生まれたならば、全生涯において経験すると同時に知識を集積する事に従事すべきです。もし経験を知識へ変換しなければ、人生に意味がありません。
それが動物の生と人間の生の主要な違いです。

動物の生とは、ただ感覚的楽しみか肉体的な苦痛である苦楽のためだけにあり、人間の生とは、智慧の力により全人生を通じて楽しむことができます。動物の生においての享楽とは、時間に限りがあります。なぜなら感覚器官を用いてのみ楽しむからです。食べたり、飲んだり、性交し終えればそれで尽きてしまうのが動物の経験する享楽です。しかし人は、知恵とともにあるからこそ、経験を楽しみ、知識そのものも満喫することが可能です。

そして、知識への渇望は失せる事がないゆえに、長時間、知識を堪能する事が可能なのです。人は知識とともに永遠の人生を楽しむ事ができます。それに対して感官を通じて得る享楽とは、短時間で終わってしまうものです。例えば食事を摂るという事であれば、舌の楽しみが継続するのは満腹になるまでです。動物も人間も感官の享楽は等しく得られますが、その違いは、動物の楽しみの場合、単なる感覚器官としてそれを用いるため時間に限定され、人間の場合は同じ器官を感覚器官として用いて楽しむこともできますし、知覚器官としても用いることができるため経験を知識へと変換することができるという点です。それゆえ人は何時間も、何日でも、何年でも、そして自らの死と向き合う瞬間ですら、より楽しむ事ができます。
智慧の道を歩む人とは、死を恐れる事はなく、さらには苦しみつつこの世を去るのでもなく、祝福された死出の旅路を行くものです。それは覚者たる人のみに許される特別な悦楽です。しかし悟りを得ていない人々は他の生類と同様に、苦しんで亡くなる時には泣きながら絶命するでしょう。死にたくない、と言いつつも、死と直面しなければならない状況に置かれ、最後には嘆きながら死地に赴くより術がありません。
しかし聖者の場合は、このような状況もまた祝福されるべきものです。「今こそ、肉体がこの世を経験する時間は終わりを迎える。私は自らのプラーラブダ・カルマ（過去生からもたらされた今生で消費するカルマ）の果てを目撃しよう」このように、賢者は死ぬ瞬間でさえ知識を得ることができます。

良い例は、毒杯を仰いで死と直面した偉大なギリシアの哲学者ソクラテスです。彼は毒を飲みながらも、どのようにして意識的な死を迎えたのでしょうか。それは、自分の死に様を智慧の力で目撃したのです。「多くの人々は自らの死を認識することなく、無意識のうちに亡くなるにも拘らず、私は自分の死を目撃しながらこの体を捨て去ってゆく。それは新しい経験ではなかろうか。私は通常では不可能である、死を体験する機会を得たのだ」このような思考とともに彼は死出への旅路に向かいました。これこそが知的な人と動物の楽しみ方の違いです。知的な人のみが、知性の愉楽を味わい、何時間であっても飽く事を知りません。しかし、先程も述べた

ように感官の楽しみとは、食べて、飲んで、性交する事などですぐに一杯になり、残るは苦しみのみです。だからこそ、あらゆる時間において知識とともにあるべきです。そのため、何らかの偉大な聖典を身近に置く必要があります。

ヴェーダ文明はインドの聖典によって完全に守られている

世に数ある偉大な本の中でも、インドの聖典の特殊性とは何でしょうか。世界史を振り返ってみれば、多くの文明が時の流れとともに現れては消えてゆきました。世界史が目撃したことはエジプト文明やメソポタミア文明、ローマ帝国など多くの文明が興り、しばらくの期間を統治しましたが、時間とともに過ぎ去っていったことです。それら文明はどこへ行ってしまったかのといえば、全て強力なる時間の口に吸い込まれてしまったのです。しかしヴェーダの文明をご覧ください。ヴェーダ文明は何千年もの間、そっくりそのまま完全に残っています。過去にもあり、今も現存し、未来もまた存在し続けるでしょう。では、このように変わることなく存在し続けるヴェーダ文明の永続性の秘密とは何でしょうか。それはインドの偉大な書物にあります。これら文献なくして、ヴェーダ文明がありのまま何千年も保たれる事は不可能です。インドの歴史を振り返れば、ギリシアのアレキサンダー大王、そしてムガール帝国、英国など様々な帝国がやってきては、何百年もの間、統治しました。

彼らはインドに訪れ、この国を永続的に支配しようとしました。さらに長期に渡って残存するためには、インドの文化を根本から破壊することが彼らにとってのただ一つの方法でした。それゆえ彼らは文明に関する様々な物を破壊し、全ての形あるもの、遺跡などの記念物を根絶やしにしようとしました。
しかし今日に至ってもヴェーダの文明はそのままあり続けています。ヴェーダ文明に関する物質的な足跡を破壊しても人々の心の中で生きる哲学を壊す事はできなかったからです。それら全てはヴェーダの偉大なる文献のおかげであり、これこそ真の素晴らしさであると言えます。
日本でも同様、仏教が継承され続けていますが、この仏教が日本において隆盛したのもこの文明がもたらした成果です。

聖典の分類

ではインドの聖典の類別について学んでいきたいと思います。
最初の分類はシュルティ（天啓聖典／聞かれたもの）です。この知識は師や祖先を通じて脈々と伝え聞かれたものであり、いかなる人物の知性によっても発明されたものではありません。そしてシュルティとはこの世界の永遠で常に変わらない知識の事です。

第二の分類は、スムリティ（聖伝書／伝承聖典）と呼びます。それは聖者がシュルティに基づいて、その時代と状況が必要とする知識をもたらしたものです。それでは一体シュルティに属するものとは何でしょうか。
ヴェーダという偉大な聖典の名について、読んだことはないかもしれませんが、もちろん耳にした事はあるでしょう。このヴェーダという聖典の特殊な点とは、何でしょうか。それは、世界において、人類が手に入れることが可能な最古で最高の完璧な本であるという点です。世界の様々な場所、例えばピラミッドの内部なども含め、古代の本が現存するという話を耳にはしますが、それらはいまだ発見が待たれるところです。しかしヴェーダは今日においても生き続け、実際に目にする事ができる聖典であり、人々は今、この瞬間にもヴェーダを学び続けています。私自身、ヴェーダを何十年も勉強しています。このようにヴェーダ聖典は、原始より存在していた書物であり、そこに述べられた久遠の知識は時を越え、脈々と耐えることなく続いて行きます。

さて、この上なく偉大な不朽の聖典ヴェーダは四つの部分に分けられます。そもそもヴェーダとは、一つのものですが、そのヴェーダが四つの部分に分かれているのです。それらはリグ・ヴェーダ（Rig-veda）、サーマ・ヴェーダ（Sama-veda）、ヤジュル・ヴェーダ（Yajur-veda）、アタルヴァ・ヴェーダ（Atharva-veda）です。
ではヴェーダという言葉が表す意味とは何でしょうか？　ヴェーダというサンスクリットの語根は√vid です。サンスクリットの全ての言葉は語根から形成されていますが、その語根からそれぞれ特定の言葉の意味を知る事ができます。√vid とは「知る」、ヴェーダとは「知識の本」という意味です。
本と言えば、世界のいかなる本であっても、何らかの知識を包含しているものです。では、なぜわざわざヴェーダのことを知識の本として、特別な価値を与えているのでしょうか。なぜなら、この世界のあらゆる分野の知識を見渡したとしてもヴェーダの中に収められていないものを考える事はできません。それが、この本の特殊な点です。

哲学の全てがおさめられているばかりではなく、多くの物質的な知識も含まれています。科学の全ての分野、例えば物理学、化学、薬学、数学、そして工学、天文学、建築学、音楽学、軍学などあらゆる知識の分野、つまり世界の全ての知識の分野が収められているのです。
どのように地上において建造物を築くかについて述べたスターパティア・ヴェーダ（建築学）から始まり、天上の彼方に在住する恒星や惑星を観測するジョーティシャ（天文学）の知識までもが収められています。

ちなみに、スターパティア・ヴェーダ（建築学）とはブラフマー神が宇宙の創造について自らの息子であるヴィシュワカルマンに教えたものです。

アーユルヴェーダという言葉を耳にした事があると思いますが、それもまたヴェーダの一部です。アーユルヴェーダのアーユスとは寿命、ヴェーダとは知識を意味し、これは生命の知識を表しますが、つまり今ある寿命をいかにして健康に保つかという知識を探求する学問です。

また、他の副次的なヴェーダの中にヤントラ・ヴェーダ（機械工学）、ヴァーストゥ・シャーストラ（地勢学）、そしてシュシュールシャー・シャーストラ（おもてなしの学問）なども含まれています。

ガンダルヴァ・ヴェーダ

芸術学はガンダルヴァ・ヴェーダと呼ばれています。それは音楽や舞踏などの科学を説いているものです。声楽や器楽と同様に、他の様々な舞台芸術も含まれています。
舞台において作り出される芸術、つまり身振り手振りによる全ての仕草はムドラーと呼ばれます。
指によって形作る印、そして目の動きによる表情、体全体による動作は、何らかの人生における智慧を観客に伝えています。
例えば人差し指を他の三つの指の組み合わせから引き離して親指と合一させ、円を作る手印をジュニャーナ・ムドラー（説法印／転法輪印）と呼びますが、これは知恵を象徴しています。
同様にハヌマーン（猿神）が胸を開き、そこに内在するラーマとシーターを見せる姿勢は、智慧と平安の両方が、外側にはなく、自らの心の内にある事を示しています。
これらがガンダルヴァ・ヴェーダの示す知識であり、人生における娯楽でさえ智慧へと導くことができるのです。

ダヌル・ヴェーダ（軍学／兵学）

さらには軍学、兵学もヴェーダの一部であり、それはダヌル・ヴェーダとして知られています。
ここで、このような質問が生まれるかもしれません。
「私は戦いについて興味もありませんし、必要性も感じません」と、そのように考える人にとってダヌル・ヴェーダを勉強する必要性があるのでしょうか。

ここでヴェーダは知識であると記憶に留めておくべきです。ヴェーダにおけるあらゆる知識は、人生の最終目標たる悟りに向かう智慧です。この文脈においてのダヌル・ヴェーダについて理解してみましょう。
戦いには二種類あります。一つは外的な敵との戦い、もう一つは自分自身の内部に隠れて存在している敵との戦いです。しかし外敵以上に、内側にいる敵の方がより邪悪です。内に潜む宿敵とは、絶え間なく戦い続け、打ち勝たなければならず、そしてより高度な戦略を必要とします。
マハーバーラタ戦争や、ラーマーヤナ物語に表されるラーマとラーヴァナの戦争、そしてデーヴァ（神々）とアスラ（鬼神）の間の長期にわたる戦いを読むならば、これらは外的な戦闘ではなく、内的な争いを表示していることがわかります。敵に打ち勝つ秘訣がダヌル・ヴェーダの主題なのです。

つまり現代において、大学で学べたり、思いつく事が可能なあらゆる知識が、ヴェーダの中にすでに存在しているという意味なのです。ですから、このヴェーダの様々な部門を学ぶだけでもずいぶんな時間がかかってしまうでしょう。本日の目的は、これらヴェーダの聖典を総括して学んでいく事にあります。それゆえ、一つ一つを詳細にわたっては説明できないかもしれません。

ヴェーダの区分

ヴェーダは内容別に二種に分類されますが、それらは次の通りです。
一・カルマ・カーンダ（行為の部）：完璧な人物となるために人生においてなす行為
二・ジュニャーナ・カーンダ（智慧の部）：悟りへ到達するため、人生に必要な知識

また、ヴェーダを内容別で分けるなら、四つに類別する事ができます。
それらは一・サンヒター／マントラ（本集）、二・ブラーフマナ（梵書／祭儀書）、三・アーラニヤカ（森林書）、四・ウパニシャッド（奥義書）です。

サンヒター／マントラとブラーフマナの部分における賛歌は、ヤジュニャ（祭祀）に用いられるためカルマ・カーンダに属します。アーラニヤカとウパニシャッドの部分は智慧に満ち溢れ、悟りのために存在しているのでジュニャーナ・カーンダとして類別されます。そしてアーラニヤカはヴェーダにおいて特殊な部分であり、カルマ・カーンダからジュニャーナ・カーンダへつながるための橋としての役割を担っています。それは、瞑想を通じて、これまで生きた人生を自己内省する機会を与えてくれます。その結果、第三の部分となるウパーサナ・カーンダとして体系づけられることがあります。

これらヴェーダの内容をかいつまんで申し上げれば、第一のサンヒター／マントラは自然を讃える事、第二のブラーフマナは自然を使いこなす事、第三のアーラニヤカは自然の中に存する事、第四のウパニシャッドとは自分自身が自然と一つになる事です。

ところで「自然」という言葉を語った場合、通常はプラクリティの側面を示しているものです。
それでは、ここでの「自然」とは、物質的側面を表すところのプラクリティを象徴しているのでしょうか。
ここでは物質としてのみのプラクリティについて述べているのではなく、プルシャが内在するプラクリティを表しています。「自然」という言葉を語るときにはいつでも、プルシャとともにあるプラクリティについて言及しています。

自然と触れ合う時、目に見えるものは確かにプラクリティ（物質）の姿を要していますが、そこで真に心を恍惚とさせるものとは何でしょうか？
例えば花を見かけたならば人々はその美しさを味わい、写真を撮影します。花とは、撮影すればその写真が何十年も残るでしょうし、気密構造にして保存加工し、シリカゲルを用いて乾燥させるなどして工夫すれば、物質そのものは長期に渡って支える事ができます。しかし、新鮮な花のように他の何ものにも頼ることなく、自らの力で物質の部分を支える事ができる状態を可能にさせるのは意識の力があるがゆえです。実物の花自体は数日しか持ちません。ついこの間買った花をなぜ今、処分するのでしょうか。それは意識が去ったからです。にもかかわらず、花はそのわずかな時間に多くの人の心を打つ事ができます。それら魅惑する力とは物質によるものでしょうか、あるいは意識によるものでしょうか。

肉体的な視覚によってとらえられるものはプラクリティであり、恍惚状態をもたらし心響かせるものがプルシャであるのです。

「これは美しい」といって花を愛でる場合、花という名の物質の中に隠れて存在する意識を讃えています。
実際的に人はそこに、花を支えている意識を感じ、感嘆しているのです。
その花から意識が去り、枯れ果てたなら以前のように観賞する必要性を感じる事はないでしょう。このように目に見えるのは花としての姿、形であったとしても、真に感じるものは意識なのです。
それゆえ、一般的に「自然」という言葉はプラクリティ（物質）のみを意味せず、プラクリティに内在しつつも顕現し光り輝くプルシャ（意識）の事を述べています。自然の美しさとは、プルシャがプラクリティに宿っているがゆえに生じます。
この点を神話ではシヴァ神とパールヴァティー女神の二神一体、アルダナーリーシュヴァラとして記述されています。

そして、物質としての花の奥に感じる喜びは意識であるのと同様に、聖典の言葉を目で追いつつも、心に明かりを灯すのは言葉の内部に潜んでいる智慧です。つまり自然と触れ合う時、目に見えるのは花や木ですが、そこに感じるのは意識であり、書物を紐解く時、目に見えるのは言葉ですが、そこで理解するのは知識であると言えるのです。
また、別の説明をするならば、言葉とは肉体における骨のようなものです。そして言葉は知識の土台になります。体を見るならば、まず骨が土台としてあり、それによって全ての組織が支えられています。しかし、目の特性においては直接骨を見る事ができず、視覚でとらえることできるのは皮膚や肉、髪の毛などです。しかし骨が肉体を維持しています。

なぜインド哲学者方は、それほどまでにヴェーダの言葉に対し重要性を与えるのでしょうか。
ヴェーダの言葉とはシャブダ・プラマーナ、つまりあらゆる知識の源となる究極の認識手段として知られます。インド哲学においてはシャブダ・プラマーナも含め、六つの認識手段がありますが、これは中でも最高の典拠となります。
ヴェーダの全ての文字が智慧をはらんでいます。たった一文字でさえ失われるなら、全体を構成する意味が低下してしまいます。言葉はもちろんのこと、一文字一文字の全てが重要で、あらたな智慧を生み出します。それではヴェーダのマントラの背後に潜む構造について学びましょう。

言葉の中に適切な意味がなければ、言葉を不当に扱うことになり、それはちんぷんかんぷんになります。しかし文法を正しく用いるならば、正しい文章を構成することができます。そして文章に知識を注入するならばスートラ（経／金言）を刻むことができます。最終的には一文字一文字でさえ、智慧へと変換されるならば、マントラ（真言）が完成することになるのです。

サンヒター／マントラ

では、サンヒターをより深く理解しましょう。
赤子が母親の子宮から生まれ出てきた時の事を想起してみましょう。母胎の中は真っ暗な世界でした。何ヶ月もの長い期間、子供はその暗闇の只中にいて、太陽や月はおろか、他のどんな光をも浴びることができませんでした。しかも子供自身では呼吸できず、母親の呼吸に頼って自らの生理機能を維持していました。赤子自ら食べる事も消化する事もできません。その子供が母親の子宮から出てきて、初めてこの世界と出会います。そこで赤ちゃんは大きな声を上げて泣きます。産声とは、最初に呼吸をした音であり、空気と触れた瞬間なのです。この時、初めて光を目にし、気温を肌で感じ、自然と触れ合います。
同様に、リシ（聖者）達は悟りを得た直後に、一体、何と出会うのでしょうか。彼らはまず、自然とそれら現象に出会います。

生徒：聖者達はこの地球上に何十年かは生きていたはずですので、すでに自然の中で過ごしていた事になります。それゆえ新生児のように生まれて初めて自然と出会ったわけではありません。「聖者達が悟りを開いた後に、初めて自然と出会う」という表現によって、一体何を説明しようとしているのでしょうか。

先生：なぜなら聖者達もまた、この世界において何年もの間、普通の無知な人としてただ過ごしていただけだからです。しかし、悟りを得た後の今では、同じ自然を別の側面から見ています。それは智慧の目、あるいは第三の目を通じて目撃するという事なのです。
大悟した後、聖者は山、川、太陽などの自然をあらめてお迎えします。ヴェーダにおける神々や女神達はこれら自然や自然現象そのものです。例えば太陽は目で見ることができる神です。太陽がなければどんな生類であれ存在する事は不可能であるからです。それゆえ太陽神の事をプラティヤクシャ・ブラフマン（直接、目で見る事ができるブラフマン）と呼びます。神が存在する事を、誰も目視した事はありません。そして神について多くを語っている人でさえ、自ら神を知覚器官で感知した事がありません。しかし太陽は、毎日自らの視覚を通じて見る事ができ、触覚によってその熱を感じる事ができます。太陽の光、熱によって全生類は生命を維持しています。そのため第一の神は太陽であると言うのです。

ヴェーダのリシ（聖者）達は悟りを開いた後、智慧の目を通じて自然と触れ合う事で、自然の中にある神の原理を悟り、鳥肌が立つ程驚きます。
ここで質問が持ち上がる事でしょう。もしそうであるなら、如何なる賛美であってもマントラになるのでしょうか。
自然と向き合った全ての人の口から、サンヒター／マントラが出るというわけではありません。空も風も、火、水、そして土も、誰もが目にするものですが、それら自然の内にある神の原理に目を見張り、その美しさに魅了されたリシが発したものだけがサンヒター／マントラとなるのです。
一般的な人々とは、人や物に対して興奮を覚えます。なぜなら彼らはその中に自らの欲望を見出しているからです。この点について様々な例を挙げて理解しましょう。

例えば新製品が発売されれば、列をなして購入しようとしますし、有名人が遠方から訪れたなら、予定を変更し、何としても会わなければと考えます。そして、珍しい食べ物を手に入れたなら、これはめったに味わう事ができないからと言って、他の事を後回しにしてもそれを口にしようとします。例えば皆さんが沖縄を訪れたとします。そこで偶然、幼馴染と出会いました。すると、「なぜ、どうして」などと口を衝いて声が出るのですが、言葉にならないほど驚愕するでしょう。単に人と会うという事であるなら、電車に乗ればいくらでも出会いがあるはずです。しかし「私の友達」「私の家族」という所有の感覚を伴う出来事が自我を興奮させるのです。
したがって、歴史的な出来事とも言える金環日蝕が生じたとしても、多くの人が注視せず「もう時間がないから早く行こう」と言って、一分も立ち止まる事なく通り過ぎてしまいました。けれども、その同じ人が、いつも百円のところが九十円になっている大根を見るならば、「ああ、こんな大きな大根が九十円になっているのか」と言って立ち止まります。ここでは自分の欲望を満たす事が可能なので驚く事ができます。天文学者にすれば何年も準備に費やし、第一優先にするほどの価値ある天体現象であったとしても、ある人々にとっては、太陽や月などの自然は常に存在するものであるし、少し形が違ったからといって、何が驚くべき事なのかと考えてしまいます。

とはいえ、この大自然においては、まるきり同じ現象など二度と起こる事はなく、水の流れ一つをとっても、感知する一切は最初で最後です。例えば同じ川に、二度足を踏み入れる事はできません。なぜならその水が絶えず流れ続けているからです。それは時間が絶え間なく流れているがゆえに、
同じ出来事に二度と出会う事ができない事を示しています。

例えば、夜空に金星と月が並ぶ事は時折あったとしても、今日は木星も一緒に並んでいます。天文学において同じ組み合わせが再び生じることはありません。それゆえ、太陰暦が存在するのです。このように知る聖者は、大自然（意識）と知識に対して驚嘆します。

彼らは自然を賛美します。太陽に対して光や熱を授けてくださってありがとうございます、と感謝します。太陽はまた、火の元素としても崇拝されています。火の元素には光と熱という二つ性質があります。肉体における体温、そして消化力は熱の原理によって引き起こされます。また、美しさや見栄えのよさ、そしてかわいらしさは光の原理によります。このように魅了し、引きつける力を火の元素による光の原理と理解すべきです。それゆえ、光や熱という原理のもう一つの形である火が第一の神であるとも言えます。ヴェーダでは火の事をアグニの神（火天）と呼びます。先程も述べたように、熱や光がなければ生類は生存する事ができないがゆえに、ヴェーダにおける多くの祈りは、この火に対して捧げられているのです。

そして肌では風を感じ、毎瞬、呼吸もしています。食物を摂り入れなくても、数ヶ月は生きながらえるかも知れませんし、水を飲まなくとも数日間は生き伸びる事ができるかもしれません。しかしこの空気を体内に取り入れなければ、一瞬たりとも生存する事は不可能です。また、肉体的な強靭さは風の要素によります。ですからこの風の神（風天）に対しても、素晴らしい人生を維持して頂けている事に感謝します。

次に水の原理に着目します。科学者が、他の惑星には地球に存在するほどの水を発見する事ができない、と述べているように、この地球が偉大であるのは水に恵まれているからです。無論、この宇宙のどこかに、地球のように豊富な水を湛えた星も存在するかも知れませんが、地球が緑に満ち溢れているのは水のおかげです。そしてこの星と相似形である生類の体においても水分の割合が多いのであれば、より若いままでいられます。若さと老いの基準とは、細胞に多くの水分が保たれているならばより若く、そこから水分が減少するほど老いていくというものです。年齢がその人に老いをもたらしたり、若くしたりするのではなく、水の原理に左右されるのです。そのため、新生児の体内は約七十五から八十％が水分ですが、成長するごとにその比率は減ってゆきます。このように若さとは、体内にある水分に関係します。それゆえ、「水の神（水天）よ、あなた様が減少するなら、私はより年老いてしまいます。どうか私の肉体をあなた様ご自身の住まいと思い、おくつろぎ下さい」と祈ります。そして、たくさん入浴し、できる限り多くの水分を取れば、水に恵まれます。このように水の原理を崇拝します。

そして大地の女神を崇拝しますが、もし、大地の女神が地震という形でその体を揺らしたなら、私達は様々な困難に直面するでしょう。それゆえ聖典では次のように述べています。「大地の女神を敬うなら、大地にまつわる災難に見舞われ、苦しむ事はありません」と。しかしこれは奇妙に、かつ迷信深い話のようにも聞こえます。けれども「毎日大地の女神に感謝を捧げる人々は、決して大地から問題を被る事はない」と言われています。つまり地震が起きたとしても、それによって苦悩する事はないでしょう。
地震は大地の女神の定期的な業務のようなものです。地震をこの世界から完全になくすために祈願する事よりも、毎朝、目覚めた時には「大地の女神よ、ありがとう」と感謝する事が大切です。
そのためここでは、大地そのものである土の元素の重要性を理解する必要があります。肉体における全ての物質的な部分、つまり身長や体重で示される体のほとんどは土の要素によって形成されています。日々、生活を維持するために何を摂り入れなければならないのでしょうか。ここで疑問が持ち上がりますが、毎回の食事において何を食べているのでしょうか。一般的に世間では「私は食物を頂いています」と説明しますが、哲学用語では「土を食べている」と表現します。なぜなら食物は全て、大地から生まれたからです。

この体は土から生まれ、亡くなった時には土へと吸収され、その間には土によって維持されます。もちろん食物の形でです。人が息を引き取ったなら、その遺体は火葬され、灰のみ残りますが、この灰こそが肥料として土へと返ります。日々、摂取している穀物や野菜が、最終的には灰となった私達の肉体を肥料として吸収します。つまり、肉体は食物によって生まれ、食物によって維持され、そして最後には誰かの食物となるのです。

では、最初の段階において、どのように肉体が食物から作られるのかについて理解しましょう。第一に父親の摂った食物の精髄がその精子となり、母親の子宮に種として入ります。そして母親が食物を摂取し、その栄養を胎児は吸収します。九、十ヶ月間、胎児は何も食べず、母親が摂り入れたものの栄養を得ています。そして、子宮から出た後もしばらくは固形物を摂り入れる

事ができず、母乳を飲みます。この母乳もまた、母親が大地から摂取したものの滋養が形となっているものです。その後、数ヶ月して成長した赤子は、自ら食物を摂り入れるようになります。そしていずれは年老いて亡くなり、その肉体も他の何かの食物となるのです。つまり、両親が大地から頂いたものがこの肉体の出発点です。その後、毎日食事を摂る事で成長し、息絶えた後の肉体、あるいは日々、排出された老廃物でさえも他の生類の養分になります。このように食物は再利用されます。地球を母なる大地として敬うのは、大地が全生類の肉体を維持しているからです。この肉体は大地から生まれ、大地に育ち、大地の上を移動し、大地に横たわり、最終的には大地へと帰入します。

このように大地は非常に重要な役割を担っているにもかかわらず、私達は人生において、大地を敬い、感謝する機会を見い出す事がありません。時折、母なる大地が地震を通じてその身を揺らすなら、大地が無生物ではなく、偉大で神聖な意識ある存在であるという事実を思い出す事ができるでしょう。それゆえ聖典では、毎朝目覚めた後、初めて足を床に下ろす前に大地の女神へ謝意を表するようにと教示しています。

このように自然の様々な現象を神の本質として敬意を払う事が、ヴェーダのサンヒター、あるいは本集と呼ばれる部分です。

ブラーフマナ

では、ヴェーダにおけるブラーフマナの部分が述べる点について学びましょう。そもそも、ブラーフマナとは何を表すのでしょうか。この部分では、ただ自然を讃え、敬うばかりでは充分でなく、それをこの世界で生きていくため、有効活用する事が大切であると説明されています。自然界は全ての資源を内包します。例えば火や水、空気をなくして、この世界での生存が可能でしょうか。ですからこれらを無駄なく役立てる必要があります。自然界の均衡を壊すことなく、正しい目的のために有効活用する方法がブラーフマナの部分の主題です。過って用いるのではなく、正しく扱うことが重要です。また、自然に感謝を捧げた上で、効果的に活かす事がヤジュニャ（祭祀）として記述されています。そして、祭祀に則って生きる事、ヤジュニャ的に生きる事こそがブラーフマナと言われるのです。
さて、自然を適切に役立てるとは、具体的にどのような事なのでしょうか。近所の川が美しいからといって、その川を賞賛するだけでは有効活用できません。川の水を浄化し、飲み水としたり、入浴するための湯としたり、畑まで引くなどして、適切に使うべきであり、ただ讃えるだけで水が必要な場所にやって来るわけではありません。川とは、写真を撮ったり、風景画を描いたりする事だけのために存在しているのではないでしょう。川の水を適切に使う事こそがここでの目的です。
この世界に生きている限り、自然の調和を乱すことなく正しく役立てましょう。自然を大切にするなら、自然もまた保護してくれます。私は日本語で学んだこの「お互い様」という表現を大変気に入っています。それは「私はあなたを敬います。ですからあなたも私の事をよろしくお願いいたします」という意味です。これがヤジュニャ的な生き方であり、ブラーフマナの部分で述べられている主題なのです。

アーラニヤカ

そしてヴェーダの第三の部分はアーラニヤカとして知られます。アランニャとは森、アーラニヤとは森に住み、そこで育ったものを表し、アーラニヤカとは森にいる間に内部で生まれたものという意味で、森林書とも言われます。森で瞑想する間に生まれた知識、もしくは智慧の事もアーラニヤカの主題です。
これまで充分自然に対して祈り、あらゆる自然現象に感謝を捧げました。そして自然を大変良く役立てました。今こそ自然の中で生き続けながら、自分自身の存在について考える時が訪れたのです。
人生の目的とは何でしょうか。そこで思惟し始めます。
「私とは一体何者なのか、何処から訪れ、この世で何を行じているのか。この世界で、あとどれ程の期間、生存する事ができるのか、そしてこの肉体を去って後、何処へ赴くというのか。行先はいまだ知ることがない。これら問いのうちたった一つであっても、答えを見出そうとする事なく、まるで愚か者のように日々、とるに足らない享楽にふけり過ごし続けているが、果たしてそれが人生の目的なのだろうか」
例えば旅に出る時には、あらゆる計画を立て準備をするものです。しかし永遠にこの世界を去り、また別の違う世界へと旅立つというのに、この不案内な行き先についての情報を全く得る事なく、何の準備もしておらず、切符さえ購入してはいません。賢者はこの点について熟慮しました。
「私はもう、無知のままこの世俗的な世界で生き永らえたくはない。このような主題を瞑想するために喧騒から離れ、人里離れた所へ赴こう」これがアーラニヤカの主題です。

なぜ賢者は森へと赴くのでしょうか。森がそれほど重要である理由とは何でしょうか。
「森」という漢字の構成を見るならば、三本の木が立ち並んでいるように、それは数えきれないくらいの木の群生があることを示しています。木とは生物ではありますが、私達の妨げになる存在ではありません。木以外の他の生物が何らかの要求をすることがあっても、木は何の要求もすることなく、木陰を与え、雨宿りの場所を提供し、果実や花、葉をもたらし、死してなお、その身全てを薪として与えて下さいます。このように、根の最下部から葉の先端に至るまで、全てを他の生類の福利のため捧げてくれます。木の存在目的は何かを得ようとするものではなく、与える目的のみがあるのです。私たち生類は、何ら要求することのない木と暮らすことで平安を得ます。それゆえ、一度でも木の下、もしくは木の周囲に座るなら、容易に瞑想する事ができるのです。ですから仏陀も木の下に座り、悟りを開きましたし、シヴァ神もまたこの木の下に座り、ダクシナームールティの姿で、真実を探し続ける求道者に智慧をもたらしています。
反対に、多くの人々とともにいるならば、彼らは哲学的主題について瞑想させてはくれません。一緒に暮らしている人に「あらゆる生類は生まれたからには、いずれは死ぬものですよ」と語りかけたとすれば、その後はどうなるでしょう。彼らは「なぜ死など不吉な事を話さなければならないのか」と言うでしょう。しかし事実は、生類は皆、いずれ死を迎えるという事であり、それがこの人生におけるたった一つの真実です。とはいえ、人々が助言する事は「時間が来れば死ぬのだから、その時対処すればよい。なぜ今、そんな事を考えなければいけないのか」という事です。ですからこうした主題は周囲の人々と議論すべきではありません。なぜなら人々は、この

主題を軽んじ、瞑想の思考を邪魔するでしょう。哲学的な主題とは一人で考えるべきであり、この独存の状態こそ、アランニャ（森）と呼ぶのです。
文字通り受け止めればアーラニヤとは森に住む事であると考えられますが、これは必ずしも実際に森に在住する事を示すのではありません。そもそも、虎やライオンなどの猛獣が生息する森で瞑想するなど困難な事でしょう。アーラニヤカとは独存の状態で寂静に留まった結果、思考に生じたものを表します。その時こそ、この哲学的内容に向き合う事ができるのです。このような点を主題とした部分がアーラニヤカです。

ウパニシャッド

ヴェーダの最後の部分はウパニシャッドです。
では、ウパニシャッドとは一体どのような内容をおさめているのでしょう。それは奥義書とも呼ばれます。「生きとし生けるものは皆、いつかは死に行くものである」といくら考え続けても何の解決ももたらしません。死を恐れ続けるだけでは人生に更なる恐怖をもたらします。そして思い悩むだけであるなら混乱し、不安にもなるでしょう。今、私は正しい智慧を得なければなりません。では一体、誰がそれを与えてくれるというのでしょうか。それはウパニシャッドを学ぶ事で、あるいはそれを悟った聖者から学ぶ事で得られます。聖者から学ぶとは、ヴェーダの知識を学んだ上で悟りを得た人物から学ぶという意味です。さて、悟りと言われる境地があります。これまで悟りという言葉を聞いた事はありませんでしたが、聖典を学んだり、聖者との稀なる出会いにより、この言葉を知るに至りました。私はこの世界の人々や物、状況に束縛されています。しかも毎日、富の獲得のため走り続けています。金銭とは肉体の世話をするためのものですが、生涯で絶えず唱え続けている唯一つのお経（マントラ）は「お金」です。私が世を去る時、このお金が次の行き先へ赴くための助けとなるのでしょうか。実際にこの貨幣で、次の世界へ旅立つための切符が買えるとでも言うのでしょうか。例え私が百億円稼いだとしても、死後、この世界から別の世界へ旅立つ時、その中から一円でも携えていく事ができるのでしょうか。ここでは、次の世界へと伴うことができる財産について議論したいと思いますが、一体何を備えて行くのだと思いますか？

生徒：魂でしょうか？

先生：その魂とは自分そのものですから、魂を携えていくという事にはなりません。それでは魂である自己が次の世界へ旅する時、携えて行くものとは何でしょうか。

生徒：知識が私とともに行きます。

先生：この肉体が滅した後、魂が携えてゆけるものは智慧です。魂である自己は二つの翼で羽ばたいてゆきます。その両翼のうちの一翼はジュニャーナ（智慧）、もう一翼はカルマですが、ここでのカルマとは次の生を継続するために、この人生で行った行為の結果を印象として携えていくものを示します。一方、前述のジュニャーナ（智慧）とは、人生を生きた経験の結果として、生じた智慧のことです。

物質的価値だけを認め、人生を費やし財産を集め続けていたとしても、この懸命に蓄積したものの中からほんのわずかであっても、来世へ所持していく事はできません。けれども、この世界で集めた真の財産である知識の一切は携えて飛び立つ事ができる、これが重要な点です。知識の価値を理解し、常に知識を集め、知性を高めようと決心する事、それがウパニシャッドという言葉の示す意味です。

「ウパ」とは「○○の近くに」、「ニ」は「足元に」、「シャッド」とは「座る」、ウパニシャッ

ドとは「近くに座る」という意味です。文字通りには、ただ単に「師の足元に座る」という意味で受け取られがちですが、それだけでは目的を果たしません。重要であるのは、知識の近くに座り、常にともにいるという事です。
しかし、今日に至るまで、私はいつも享楽の対象物とともに座り、友達や家族、親戚などの近くへ行って、彼らの傍に座りました。その後、彼らが与えるのは無知だけであり、知識を授けてくれるのは聖典のみです。ですから、どうか聖典の近くに座るために努力してください。なぜならこの世界から持って行く事ができる、ただ一つのものは知識だからです。それ以外のもの全てはこの世界に捨て去って行きます。たくさんの収入を得て、銀行口座に多くの預金があるとしても、死を迎える時には、全ての財産を置いていくものです。自分名義である不動産や車も全て残したまま、魂はこの世を後にします。一円たりとも、持っていく事はできませんし、どんな友達も自分と一緒には行ってくれません。では一体何が、ともに旅立ってくれるというのでしょうか。それはただ一つ、知識です。この世界で集積された知識の全てが、カルマとともに自己（魂）の両翼となり、空高く羽ばたいていくものです。これがウパニシャッドの説く偉大な教えです。

とはいえ、これまで一度たりとも知識を大切にしようと思った事はありませんでした。そこで、この瞬間以降、全ての時間を知識のために使い、一瞬たりとも、智慧と離れて無駄に過ごしたくはないと真に誓いを立てます。知識なしの人生には意味がないのです。
このように知識の真の価値について理解する事をウパニシャッドといいます。動物が生きているのと同じように私もこの世界で生きています。それでは、私と動物との相違はどこにあるというのでしょうか。動物はその生において知識を得られないというのに、人間である私は、広大な宇宙を把握することが可能な素晴らしい知性に恵まれました。とはいえ、これまでは決してこの知性を正しく役立てる事がありませんでした。しかも私にとって、この世界で過ごす時間はそれほど長くはないかもしれないのです。それゆえ、残された時間があと何年かであったとしても、数ヶ月や数日、あるいはほんのわずかな瞬間しかないとしても、全ての時間を智慧のために費やします。

この授業が始まる前に私の友人から電話がありました。友人は「私の義理の父が、医師からあと数日の命である事を告げられた」と話しました。医師は家族に対して「この方は今年の桜（数週間後に訪れる予定の桜の開花）を見る事ができないかもしれません」と言ったようでした。人生とはこういったもので、いつ、いかなる瞬間にもこの世を去る可能性があります。それゆえ、残された時間がどれほどのものであったとしても、知識とともに過ごすべきです。これこそウパニシャッドが教示する主題です。

命の科学

また、ウパニシャッドは人生の科学を示します。
ここで述べられる「人生」という言葉は、生活を意味しておらず、命そのものを表しています。人生を送る上での生活については、他の三つの部分であるサンヒター／マントラ、ブラーフマナ、アーラニヤカでよく説明されていますので、ウパニシャッドにおいては命の流動（変遷？）について特に述べられています。
それを命の科学、あるいは命の歴史、命の哲学といくら弁舌を尽くしたにせよ、的確な表現をするに足りないでしょう。

そして、このウパニシャッドにおいての主人公は自分自身です。ウパニシャッド以外のあらゆる書物においての主題は、真の自己自身とは接点のない何か他の事柄です。しかし全てのウパニシャッドで語られている主題は、主役である自己についてなのです。先程申し上げましたが、第一の問いである私とは誰であるか、この疑問にウパニシャッドは答えを与えています。さらに、私はどこからやってきたのか、ここからどこへ行くのか、この世界で何をすべきであるのか、今、ここで何をしているのか。これらすべての答えもウパニシャッドによって述べられているのです。

この世界へやってくる以前には、自分を取り囲む人々の事は知る由もありませんでした。けれどもこの世へ訪れた途端、この人は私の母であり、あの人は父であると呼んでいます。あちらにいる人々は親戚であり、こちらは友人、そしてそこにいる者たちは私の敵です。このように、自分の周りの全ての人々を分類してしまいます。
自分の感情の奴隷となった私は、身勝手にも誰かの事を友人として尊敬し、誰かの事を敵として非難し続けています。そうして一つの人生が終わってしまうのです。「私が何人かを愛し、何人かを嫌いました」、それが私の人生の歴史を記す事になります。

しかしウパニシャッドは、それをあなたの人生とすべきではないと教示し、開眼させます。自分がこの世界へ訪れた事には目的があります。この人間の身体を得るという事はとても貴重な稀なる機会です。生類には八百四十万種類ありますが、それらの生の中でも人間の身体は最上のものです。にもかかわらず、この最も高価な命の価値を理解していません。
知性とは、人間以外八百四十万種のどんな生物も持ち得ないものです。この知性をどのように行使すべきかと言えば、悟りの道を歩むために役立てるべきであり、それはつまり自己を知るということです。それこそが人間の人生と言わしめるものであり、これらの点がウパニシャッドという聖典にて説明されています。

ですから人間の肉体において命ある限り、できるだけ多くの知識を集積しましょう。さて、先程述べた四ヴェーダは何百ものウパニシャッドを有しています。それらウパニシャッドの中で重要なものが十一あります。これから十一のウパニシャッドの題名を述べますので、記憶に留めてください。なぜ、これらウパニシャッドの名だけを覚える必要があるのかと申しますと、人生において、可能であればこれらを読んで頂きたいからです。題名を心の中に留めておくな

ら、これらの聖典があなたに学びの機会が得られるよう祝福を与えてくれます。

一・イーシャーヴァースヤ・ウパニシャッド
二・ケーナ・ウパニシャッド
三・カタ・ウパニシャッド
四・プラシュナ・ウパニシャッド
五・ムンダカ・ウパニシャッド
六・マンドゥーキヤ・ウパニシャッド
七・タイッティリーヤ・ウパニシャッド
八・アイタレーヤ・ウパニシャッド
九・チャーンドーギヤ・ウパニシャッド
十・ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド
十一・シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド

これらが十一の主要なウパニシャッドです。人生を過ごす中で、時間を見つけては、どうかこれらウパニシャッドを読み、堪能してください。ウパニシャッドを読むという事は、自分自身について読む事に等しいものです。それは私自身について知ることを意味していますので、これらのウパニシャッドを勉強する事は大変重要です。それゆえ、ウパニシャッドを学ぶための時間を何よりも優先してください。

生徒：先ほど、ヴェーダには、世界の全ての知識が書いてあるという事でしたが、科学の知識は常に進歩し、増え続けていると思います。そのような視点から見ると、どのようにして何千年も前から存在する書物であるヴェーダに全ての知識が書かれてあるというのでしょうか。

先生：非常に素晴らしい実際的なご質問です。科学は日々、目覚しく進歩し、科学者達は常に新しい理論を展開させるため忙しく研究に専念しています。しかし、その科学者達は、いつ、どの時点で、最終的な結論を得るのでしょうか。
いずれは、この全宇宙の知識を手に入れる事ができるのか、もし、それも不可能だと言うならば、「私はもう研究することによって答えを探し続ける必要はありません。全ての知識を修めました」と宣言できる日が訪れるのはいつなのでしょうか。ヴェーダでは「物質にまつわる知識を勉強すればするほど、その知識は遠ざかっていく」と述べています。物質とは毎瞬変わっていくものであるため、それらが変化した瞬間に、関係する知識もまた変わってしまいます。つまり物質に関する知識に終わりはないという事です。現代において最も知力の高い科学者が、生涯かけて研究したとしても、この宇宙の物質に関する全知識の一％でも学ぶ事はできないでしょう。仮に、何千回転生したとしても、それらのほんのわずかでも把握する事は不可能です。物質にまつわる終わりなき知識に対して、理解を深めようとしても、その探求は人を本来の道から脇へとそらし、さらに遠くへと連れて行くでしょう。そのため、人はこの世界において好奇心という名で束縛されています。人や物、状況にまつわる好奇心のために、生涯全てがその知識に捕えられてしまうからです。それゆえヴェーダでは、「好奇心の世界に捕まってはならない。むしろ自分自身を知るならば、世界の全てを知るであろう」と教えています。

例えば一釜分のお米を炊いているとします。そのお米がきちんと炊けたかどうか確認するために、全ての米粒を確かめる必要はなく、たった一粒のお米を手に取るだけで、お釜に入っている全てが炊けたかどうか判断する事ができます。
同じように、自分自身を知るならば、全世界を知る事ができます。個人の世界を小宇宙と言い、全世界を大宇宙と言います。自分の中にあるものは、外の世界全体にもあり、自分自身を知るならば、宇宙全体をも簡単に知ることができます。ですからヴェーダでは、まず己自身を知りなさい、そうすれば全世界を容易に理解する事ができる、と述べているのです。

生徒：科学の個別の知識が書いてあるわけではなく、その知識をもっと広い意味で、概念として書いているのでしょうか。例えば知識を得るための方法などがヴェーダに記述されているのでしょうか。

先生：ヴェーダの科学は一時的な法則ではなく、宇宙において不変の法則を述べています。一時的な法則とは、時代や地理、人々によって必ず変化します。それに対して不変の法則とは、どんな時代や場所、人々によっても変化しない基本となる知識の土台です。この知識は過去もあり、現在もあり、そしてこれから未来もあり続けるものです。
第二点として、この人生を生きるための知識があります。これは細部に至る知識とはまた別物です。例えばこれから夕食を頂くとしたら、その食事が菜食であるかどうか、あるいはご飯なのか、パンなのかを知りたいと思うかもしれません。自分が摂る食事について、ある程度のことは知るべきであるように、人生を生きるためには基本的な知識が必要です。しかし、それ以上、好奇心を満たすために詳細を追い、深く掘り下げていく必要があるでしょうか。好奇心による追求がその人にとって必要であるなら、続けるべきであり、どのように追求すべきであるかという公式をヴェーダは教えてくれています。また、人によっては詳細に渡る知識をどこまでも延長する事ができます。

そのためヴェーダでは知識を二種に分けています。一方はパラー・ヴィッディヤーで、もう一方はアパラー・ヴィッディヤーです。一つは高次の知識であり、もう一つはそうではない知識のことです。また、ヴィッディヤーとは知識という意味です。前述のものは自分自身を知るための知識、つまり至高の知識、智慧という意味で、後述のものは私以外の世界について知るための知識です。
例えば、昆虫学について興味を持つのも良い事ではありますが、虫について詳しく知らなくても人生ではそれほど失うものがありません。虫について何かを尋ねられたとしても、自分は昆虫学者ではないため「私は虫については詳しくありません」と答えるだけでしょう。しかし、自分自身について、簡単に「知らない」といって逃げてしまうのならば、何の得にもなりません。なぜなら、その無知によって、この世界に再びより強く束縛されてしまうからです。その結果、再度、動物の世界、植物の世界へと舞い戻ることになります。

この世界には八百四十万種の生があります。もし今生において悟りを得なければ、もう一周、八百四十万種の生を経る事になるかもしれません。それをサンサーラ（輪廻転生）といいます。

サンサーラという言葉を耳にした事があるかもしれませんが、それは輪を描くように流転する生と死の繰り返しを意味します。降車駅に気づかぬまま、環状線に延々と座り続けるなら、何周も回る事になるでしょう。誰かが乗り過ごしているその人に対して、思いやりから「この駅で降りなさい」と指摘するならば、降りることができます。同様に真の自己を認識できないならば、サンサーラの中を何度も回り続けることになってしまいます。昆虫について知らずとも失うものはあまりありません。しかし、自己自身を悟らなければ全てを失います。ですから先程も申し上げた通り、ヴェーダは「自ら自己を認識せよ。自身を理解したなら、この世界の理解は容易い」と説いているのです。

生徒：ヴェーダの中にはダヌルヴェーダ（軍事学）が含まれていますが、なぜ戦う事がパラー・ヴィディヤー（至高の知識）とされるのでしょうか。

先生：ヴェーダに書かれてある主題は全てパラー・ヴィディヤーと言うわけではありません。ヴェーダの中には、パラー・ヴィッディヤーとアパラー・ヴィッディヤーの両方が内包されています。ヴェーダは物質的な知識を教え、精神的な知識をも教えています。自分自身に関する知識を述べている部分は、ほんのわずかですが、物質に関して述べている部分はヴェーダの中でも大きな量を占めています。

生徒：ブラーフマナについて質問いたします。アーラニヤカについては、「アランニャは森という意味です」と教えて頂きましたので、想像するのは簡単だったのですが、ブラーフマナとはブラフマンと関係があるのでしょうか。自然を正しく使い、それによって自然から保護される、という事とブラフマンという事が結びついたら、もっと詳しく理解できそうな気がします。

先生：本来、ブラフマンを悟った人のことをブラーフマナと呼びます。
また後に述べますが、ブラーフマナとは、全ての思考を智慧へと変換できる人々の事をも表します。前述の通り、自然に感謝を捧げた上で、効果的に活かす事をヤジュニャ（祭祀）と呼びます。そして、祭祀に則って生きる事、ヤジュニャ的に生きる事は、いかなる利己的な欲望もなく、思考を良い方法へと変換することができる、このブラーフマナと呼ばれる人々のみが可能です。つまりヤジュニャ（祭祀）を執り行う事ができるのはブラーフマナの人々だけであるので、自然を有効活用する事を主題とするヴェーダのこの部分をブラーフマナと呼びます。

生徒：次はウパニシャッドについての質問です。先程の誓い、「一瞬たりとも知識以外のことに時間を使いたくない」という切実な願いは、今の私にとっては遠い事で、そういった願いを持ちたいと思いながらも、義務という名の日々の雑事によって、糸に吊られた操り人形のように常に引きずられています。しかし、いつも知識とともにありたいというような願いを持つことができるようになるために、ウパニシャッドが存在することを今、習いました。そのウパニシャッドに触れることによって、操り人形のような状態から解放されるのでしょうか。

先生：これは大変重要な質問です。「ここ、つまりこの世界にどのような理由で生きているのでしょうか」と質問したとします。この問いにどのように答えるべきでしょうか。

生徒：それを知るために生きているように思います。

先生：通常、人々は「神が私を誕生させたのだから、仕方がないだろう。生まれたから生きているだけだ」と答えるでしょう。しかし、それはここでの答えではありません。ウパニシャッドはこのように述べています。自分がこの世界に存在しているのは、自己を認識するためであると。人間以外の生類は、己を知る機会を得ることができません。犬は犬として生まれ、犬として死んでいくしか選択肢がありません。しかし仏陀のような覚者たちは、多様な種の生物として生まれ、人間の肉体を梯子として使い、ついには神へと到達しました。この違いをよく理解すべきです。猫や虎など人間以外の生物は、その生物としての生涯を閉じるより他ありません。
しかし私達、皆、人間はどうでしょうか。自分は人間というべきか、はたまた二本足の動物として出生しました。このような生まれでありながら、自己を神の一部として認識できるのであれば、人生に成功したと言えます。つまり人には、自らが神であるという気付きを得る能力があり、これこそが人として生きる人生の目的なのです。他の生き物の生とは苦楽の経験を目的として存在するため、それらの体で自己を認識する事は不可能であり、選択肢はありません。しかし人間として生きている私達は、様々な選択肢に恵まれています。「せっかくこの世に生を受けたのだから、楽しまずに過ごすのはあまりに惜しい」と、このような考えを持っている人は二本足の動物と呼ばれます。人生を享楽にふけるために過ごしている人と、動物の間に相違が見られないからです。無論、自分は二本足の動物として生れ落ちたかもしれませんが、人生最後の瞬間にでも、己は神の一部であると認識してから戻ってゆきたいのです。
この哲学を学び続けているならば「死ぬ」という言葉を使わず、「この世界を去る」と言いましょう。インド哲学においては「死」という言葉はありません。

生徒：しかし、サンスクリット語のムリッテュ（死）という言葉を何度も授業で耳にしました。それについてはどのように説明する事ができるのでしょうか。

先生：言うまでもなく、インド哲学においても「死」という言葉を粗大な体のために用いる事はありますが、この言葉は魂である自分自身に当てはまるものではありません。
あらゆる生類は、この世界へ経験を得るために訪れました。そして再び、別の経験を得るために他の星へと旅立っていきます。魂が、絶えず経験したいと意図するがために、一つの惑星から別の惑星へと旅し続けていきます。真の自己を理解するならば、その旅をさらに堪能する事ができますし、知らずにいるならば、惨めなものになるでしょう。なぜかというと、目的地やそこに至る道程が明確である場合には、道すがら風景を楽しむゆとりが得られます。しかし目的地はおろか、今歩いている道さえ見当もつかず迷い続けるならば、不安でいっぱいになり、旅を楽しむどころではないでしょう。それゆえ、智慧とともに旅すれば真の楽しみのもととなり、無智に覆われて旅する事は苦しみのもとになる、とウパニシャッドは教えています。ウパニシャッドとは知識に絶えず触れているという事です。ここでは、この大切な知識のためにどのくらいの時間を費やす事ができるのかという事が重要です。
ヴェーダは、二十四時間、三百六十五日、生涯にわたって知識とともにい続けるべきであると教示しています。これは非常に肝要ではあるものの、知識とともに二十四時間を過ごす事を命

じられたとしても、それは不可能です。仕事や料理をしなければならず、入浴も必要です。そんな日常でありながら、どうやって二十四時間、絶えず知識とともにいられると言うのでしょうか。
しかし、そもそも行為とは、体によって為されるものであり、その時、心、思考器官は完全に自由です。誰が行為を行っているのか、よく瞑想してみれば、それは肉体に過ぎない事に気付くでしょう。例えばこれから夕食を頂く事になった場合に、一体誰がその食事を摂ると言うのでしょうか。まずは口が夕食を頂きます。これまで何度も食物を口にした事がありますので、手はどこに食べ物を入れなくてはならないかについてはすっかり身についています。そして、この口もまた、食物を体内へ摂り入れる事に良く慣れています。インド料理のナンを初めて頂く時には、どのようにして食べるのか、人々から知識を得る必要があります。しかし、食べ方に慣れて以降は、自動的にナンを食べる事ができます。つまりその時点で、思考器官は自由です。その思考器官の中に流れる一つの思考も、一滴の意識も、さらには一秒にも満たない刹那であっても無自覚に使わないということが、ここで述べている主題の示す意味です。これら三つが同時に働く事こそが成功した人生なのです。

本来、自己は分かつことのできない魂ですが、この世で生きる私達には二つの側面があります。内的な側面（精神）と外的な側面（肉体）です。これら二つの側面はどのような基準に従って分割されるのでしょうか。外的な側面は意識に管理され、内的な側面は知識（思考）によって管理されます。これら二つはアートマンのチットの本質です。

例えば肉体が忙しく食物を摂取している時には、自分の意識が忙しく行為をしているという事です。しかし、この状況下において思考器官は自由であり、それゆえ知識とともにいる事ができます。肉体が働いているのは意識が存在するからですが、その一方で、思考器官は知識とともにあるべきです。このように魂とは、二つの側面から働いています。

そして、両者は常にともに行くわけではなく、互いに別々の事を行っています。もし、両方がともに機能するならその人は人間ではなく、神となります。しかし問題は、相互同じ道を行くのではなく、別々な方向へ動いているという点にあります。
本来であれば、意識によって肉体に行為をさせ、その間思考器官は、その時点での必要性を満たし、掲げる目標に関する知識に従事させるべきなのです。これが美しい生き方となります。

学びの三段階：情報、知識、智慧

生徒：自分を知るという事と知識についての質問です。インド哲学の主題では常に「自分を知ろう」と呼びかけるのですが、自分を知るとは、どういうことでしょうか？　詳細を知ろうとすると、真の知識から遠ざかるとの事ですが、詳細を考える事が知識であると思います。それ以外の知識とは何でしょうか。自分を知るということですが、自分の性格は何か、自分の体は何か、という事も考えていくならば細部を追う事になります。では、自分を知るとは一体、何を指摘しているのでしょうか。

先生：今頂いた質問の中には二つの主題が混合しています。一つは知識を学ぶ過程において経る段階、もう一つは知識の主題そのものについてです。
これらの回答は、学びの三段階である情報、知識、智慧について理解することで見出すことができます。人はなぜ学ぶのでしょうか？　それは世界をよりよく経験するためです。一般のジーヴァ（個々の魂）は経験することによって学びを得ますが、知的な人は経験から学習することのみならず、さらに人生において有意義な経験を得るために知識を蓄えることができます。

思考は三つの段階において用いることができます。
この学びの三段階についてですが、一段階目は情報を収集し続ける事、二段階目は集めた情報について熟慮し、そこから知識を生じさせる事、そして三段階目は智慧とともに人生を過ごすというように、一段ずつ上昇させていきます。なぜ、人々はテレビやインターネットを見たり、ラジオを聞き、新聞や雑誌を読み、人とおしゃべりをするのでしょうか。それらから情報を集めようとしているのです。テレビのニュース番組を見ては「こんな出来事、あんな出来事があったのか」と言って様々な情報を集めていきますが、それらは知識と言えるでしょうか。実際には単なる情報であり、今日学んで、明日には忘れてしまうでしょう。なぜなら新しい情報が台頭した時、以前の情報はいらなくなります。今日新しい新聞を手に入れたなら、昨日の新聞は片付けてしまうように、情報とは時に応じて変わっていきます。

自分自身を如何にして悟るかという主題をよく理解するために、まず学びの三段階について語りました。例えば今日はたくさんの食物を摂り入れましたが、明日の朝までには、これら食べた物のうち不必要なものは老廃物として捨てられるでしょう。このように懸命に収集しつつも、簡単に破棄されるものが情報です。しかし、摂取した食物のうちの一部は長期に渡って、肉体の中で栄養を与え続けます。同様に集めた情報の精髄は知識になり、しばらくの間、人生を生きるために役に立ちます。摂り入れた食物から得た栄養により、活動する事ができるのと同じように、人は得た知識によって自らの人生を生き、経験をし続けます。そして、この知識からさらに精髄が生じ、絶えずこの人生で生き続け、この世を去ってからでさえも魂とともに旅するもの、それこそが智慧です。

なぜ自己を悟るべきか

自己を知らずにいるならば、どんな利益があり、またどんな不足があるというのでしょうか。失ってしまうものとは何でしょうか。私の先祖も生を受け、自らを悟る事のないままこの世を去りました。同時にこの世界の多くの人々は、真の己を認識せずに世を去ってゆきます。そうであるなら彼らと同じように、自己を悟らずにこの世を去ったとしても、一体何を逃してしまうというのでしょうか。なぜ自己にまつわる知識のために、自分の貴重な時間と精力を使わなければならないのでしょうか。その時間を使って金銭を獲得し、資産を運用し、人生の享楽にふける方がより良いのではないでしょうか。このように議論することで、智慧が自らの心の内に生じます。内部で熟慮し続ける事こそがヴェーダの瞑想です。心に留めておくべきは、常に正しい意見を述べなければならないと固定概念にとらわれるならば、思考のみちすじが阻まれるため、瞑想そのものが不可能になるという事です。さて、この点に関してどのような所感をお持ちでしょうか。

生徒：外の世界と接する事で得られる「楽しい」という喜びは一時的なもので、すぐに終わってしまうと理解しています。その後に訪れる「辛い、苦しい」といった感覚の方が時間としては長いと思います。それに対して知識とともにいる時間の喜びはさらに延長できるものですから、私はできる限り時間を知識とともに過ごすように努力するべきだと思います。

先生：けれども、真の自己を認識しないがゆえに逃してしまう事とは何でしょうか。別の言葉で言うならば自己を悟ることでどんな利益を得るのでしょうか。なぜ、それほど自分を知ることが重要なのでしょうか。

生徒：私と私でないものを区別する事で、私は永遠なのだという事を理解でき、死への恐れがなくなるという事だと思います。

先生：他には、自分自身を知ることでどんな利点を得るのでしょうか。

生徒：怖れや恥ずかしさ、悲しみなど人生の中での否定的な思考がなくなるという事だと思います。自分を知らないがゆえに内外で起きた事柄の理解は困難となるのですが、自己を知るならば引き起こされた出来事に対して納得する機会を得ますので、否定的な思考を制御できるのだと思います。

先生：人生を過ごす中で、この点についてどのような見解をお持ちでしょうか。

生徒：自分自身を悟る事で、生きている意味が明確になります。

先生：今、述べられた通り、この肉体において命ある間に、生きる意味が明確になります。さて、この世界においては、自らの肉体も含め、たくさんの物質とともに生きることになりますが、自分自身と物質はどのように違うのでしょうか。

肉体と物質の相違

例えば、自分と、今目前にある机との違いは何でしょうか。これは、奇妙な質問だと思われるかもしれませんが、哲学の謎を解くことにおいては非常に大切な問いです。自分自身と机が違うという事は幼い子供でさえ周知の事実ですから、なぜそんな愚かな質問をするのかと考えるかもしれません。けれどもインド哲学のこの分析は知識を得るために正しい認識をもたらします。ここでは、自分自身と机の相違について言葉を通じて説明してみましょう。

生徒：私自身には意識があり、机には意識がないという事が相違点であると思います。

先生：確かに、大きな相違点は私には命があり、この机には命が宿っていないという事です。それが根本的な違いと言えますが、では、自分の肉体とこの机との違いは何でしょうか。

生徒：両方とも物質です。

先生：この二つの間に全く相違はありません。

生徒：体は新陳代謝があって、物質と熱量が交換しているけれども、この机は交換がそれ程にないと思います。

先生：誰を因とし、そして誰によって、この体はこれら全ての活動をしているのでしょうか。机のような物質には存在し得ない、その能力とはどこから生じるのでしょうか。肉体の精力の根源となっているものとは何でしょうか。

生徒：「生きている」ということが根源であると思います。

先生：それを根本的になんと言いますか？

生徒：肉体が意識とともにある事だと思います。

先生：その根源を意識と呼びます。ここでの意識とは、それが失われたならば無自覚や無感覚など、思考器官において思考が流れていない状態に陥ることのみを指しているのではありません。呼吸があり、心臓が鼓動し、体温が維持されるなど肉体的な機能が停止していない昏睡状態や脳死は、この主題において死とは定義しません。なぜなら肉体的な意識は存在しているからです。ここでは、この肉体的な意識、つまりその体に命が宿っているのか否かが論点となっています。
意識が伴っているからこそ、この肉体は言葉を語ることができます。私たちは「私が話している」と単純に主張するものですが、真に発言しているのは誰でしょうか。肉体そのものが何かを述べる事はありません。なぜなら、この体から意識（命）が去るならば、すぐさまその場に倒れてしまい、もう二度と呼吸する事もありませんし、血液も循環せず、消化も行いません。無論、

言葉を発することなどなく、如何なる行為も行うことはできません。つまり、この肉体から意識が失われたならば、物質と同等であるという事です。机が壊れたとしても、その一部分を何らかの目的で使用できるのですが、この肉体から意識が消失したならば、すぐに火葬しなければならないのです。なぜならそれは腐敗し、臭いを放つばかりでなく、誰もがその遺体を怖がるからです。それゆえ、亡骸は早急に火葬し、人々の目に触れないようにします。このように物質と肉体とは同じものですが、そこでの違いは意識が起こしています。
では「私」とは誰でしょうか。「私」はその肉体という物質か、もしくは意識でしょうか。
今、私は皆さんに語りかけ、皆さんは私の言葉を聞いています。しかし、ひとたび意識がこの肉体から離れたなら、どれ程の間、ともにいられるでしょうか？　意識の去った肉体には何の執着もないでしょう。つまり「自分とは意識である」という事なのです。
けれども私達は意識そのものを全く見ることができません。目にしているのは肉体のみです。つまり人は物質的な側面しか知覚することができず、意識的な側面を感覚器官で捉えることは全く不可能です。そのため科学はこの地点において立ち止まってしまい、意識の領域にまで足を踏み入れる事ができません。物質的な領域においては、さらに詳細を求め、分け入る事ができますが、いまだ意識の世界を開拓する事はできずにいます。なぜならまだ何も証明させるものがないからです。おそらく科学がこの意識の世界へ踏み入るにはずいぶんな時間がかかる事でしょう。

そのためヴェーダは「物質を探究するために多くの時間を費やすより、自己である意識を理解するためにたくさんの努力を傾ける方が良い」と述べています。しかし、どんな物質についても何も知らずにいることは不確かなことですから、人生を維持する上で、幾分かは知らなければならないでしょう。このように物質については、ある程度の認知が必要ですが、それ以上多くを、真の自己（意識）について理解すべきです。なぜなら、物質である肉体はいずれ燃やされ、灰となるものだからです。そして自分自身はこの肉体を後にしますが、旅立つその自己こそ、意識とともにある知識です。

聖典から得られる智慧の恩恵

生徒：聖典を学び、真の自己にまつわる智慧を得ることで、どんな恩恵があるのでしょうか。

先生：人間の肉体とは、非常に高価な代償を支払い、せっかく自然界の恩恵により買い入れたものであるがゆえ、この肉体を悟りの旅を歩むため、健康な状態に保つべきです。
ここで私たちは三種の主要な障害である、恐怖、羞恥、悲哀が悟りの旅への道程を阻んでいることを理解しましょう。そして肉体は自らが目的に到達するために重要な乗り物です。しかし今日、三種の苦しみとしてもたらされる自然災害や人災、自らが持つ心身の問題など何らかの理由によって、この肉体から命が去るとしても妥協しなければなりません。真の自己には如何なる問題もないからです。この体が失われるというなら、肉体に別れを告げ飛び立ちます。魂である自分は、またどこか他の場所で、別の肉体を通じて生まれてくる事でしょう。自分自身を知ることによって、このような確信を得ることができ、怖れや羞恥、悲哀など、どんな不幸にも惑わされることがなくなります。

なぜならこのような全ての問題は、肉体にまつわるものだからです。心身の病気が影響を及ぼす事ができるのは体や感官、あるいは思考器官だけであり、己自身である意識、つまり永遠の存在には触れる事さえできません。もし、自己の内部に大きな疾患があるとすれば唯一つ、無知という名の病魔でしょう。それは人間の内部に潜む重度の病と言えますが、この無知という患いを根絶したならば、悟りを開く事ができます。これがヴェーダ文献の智慧であり、この点を適切に理解するならば、人生は成功したものとなるでしょう。

ヴェーダのプルシャ・スークタム

これからお食事の間、ヴェーダの一部分であるプルシャ・スークタムを茶丸さんに詠唱していただきましょう。なぜなら食事を摂る間には、勉強し続ける事はできず、同時に思考も沈黙のままでいる事が難しいからです。人々が集っているという事は、否応なくお互いの世間話になり、せっかく知識の炎で清められた思考器官が再び汚されてしまいます。
清浄さを保つために、食事を頂く間は、耳で聞きながら心でマントラ（真言）を感じましょう。そうすることによって体が食事を摂ると同時に、心がマントラを享受します。

プルシャ・スークタムの詠唱

このプルシャ・スークタムはヴェーダのサンヒターの一部分です。ここでは全宇宙を神として賛美しています。至上の神と呼ぶ時、その神とは一体何を示し、そしてどこに存在すると言うのでしょうか。人々は、神は天国にいるなどと簡単に口にします。なぜ神が天国だけに隠れていると言うのでしょうか。神は自ら天国で楽しみながら、人々をこの世で苦しませているとでもいうのでしょうか。そこでこのマントラは、神の定義を述べています。「全ての意識を一つとしたもの、それが神である」と。

ヴェーダのこの賛歌では、神とはあらゆる生類に意識として内在しているものであると称賛しています。
ヴェーダにおいて説明されている神とは全知、全能と同時に遍在です。それゆえ、プルシャと讃えていますが、それは、あらゆるところに遍満している意識という意味です。この世界は物質と意識の結合したものであると同様に、人間もまた意識と物質の組み合わせです。物質とは絶えず変化し続けますが、その背後の力である意識は決して変わる事のない、永遠なる存在です。この意識を土台として、物質は不断の活動をし続けていきます。プルシャ・スークタムではこの点について賛美がなされています。

今日はインドの聖典の全てを紹介できず、ほんのわずかしか勉強する事ができませんでしたので、インドの聖典第二部は、また次回の授業に学びましょう。
私たちの人生はとても短いです。短い人生の間にどうかでき得る限り多くの時間を聖典の学習と指導に費やしましょう。人生においてはたくさんの種類の享楽があるものの、知識以上の楽しみはありません。全ての楽しみは長くは続かず、短時間で終わってしまうものです。また、すぐに飽きてしまうものです。けれども知識の楽しみは長期に渡って継続し、今生最後の一呼吸に至るまでのみならず、来世への旅を伴にします。
この智慧の重要性を理解し、聖典の学習を続けましょう。
本日の学びは私にとって大変有意義なものでした。皆さんがどれほど楽しんだかは存じませんが、私自身はとても楽しみました。では、ありがとうございました。